



兼澤修悟さん

今月は、いわて農林水産振興協議会から「明日を拓く担い手賞」を受賞した金沢で農業を営む兼澤 修悟さんにお話しを聞きました。兼澤さんは自身での農家経営のほかに、釜石地域の農業振興協議会が主催する行事に積極的に参加し就農希望者へのアドバイスなども行っています。

受け継がれてきたものを大切にしながら、新しいことへも挑戦していく

一度農業とは別の仕事をしていましたが、小さいときから家を継ぐ気持ちがあったので震災の前の年に大植にもどり、元からやっていた牛の飼育やコメ、シイタケの栽培を始めました。震災の時は、原発被害でシイタケが全部だめになったりかなり苦しい時期もありました。震災から10年を迎え、放射性物質の基準値を超えるものは出ませんが、それでも

検査は欠かせません。

今回の受賞のきっかけになった花き栽培は、震災後、シイタケなどの被害が大きかった時、親戚から「花をやってみれば？」と勧められたのがきっかけでした。牛やコメ、シイタケも継続しているのですが、「複合経営」というやつです。花きについてはトルコキキョウやリンドウなど季節に合わせて栽培し、花束として産直に卸しています。

また農協のアドバイザーの方から「大植は内陸に比べて雪も少なく温か

いので栽培してみても？」と提案されたのがきっかけではじめた「寒菊」の栽培は、町で花き栽培をしている人たちとグループを作り、補助金などを活用しながら栽培し、出荷量が全体的に減ってしまう、12月に出荷しています。

農業の未来の担い手として

花き栽培は、作付面積の拡大やハウスを増やしたいという思いはありますが、今は一人で作業しているのが難しいというのが現状です。大植だけではないですが、農業の担い手が不足しています。まずひとりずつでもいいので、あたらしい人を増やしていくこと、そして、すこしずつ作付面積を増やしていくことが目標です。内陸部の冬場は、どうしても花が市場に出回らないので、こちらで栽培したものを供給すること考えています。

